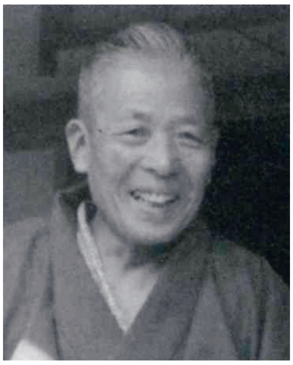
創業者偉人伝
第41回

つながりを大切に100年 国産ジョイントの歴史は 三好キカイの歩み



三好（みよし） 光太郎（みつたろう）（1892〜1963年）

■株式会社 三好キカイ

本社所在地：兵庫県川西市平野1-5-20　従業員数：62名
創　　業：1918（大正7）年8月　資本金：4,000万円
事業内容：ユニバーサルジョイント、パイプジョイントシステム“パイジョン”の製造・販売

鉄工所を創業 ジョイントの開発を決意

伊藤博文が２度目の内閣総理大臣に就任した1892（明治25）年、同社の創業者である三好光太郎は和歌山県に生まれた。

当時、大日本帝国憲法が1890（明治23）年に施行され、政治を取り仕切っていた薩摩藩と長州藩は藩閥政治体制を敷き、憲法を無視した独裁的な政治を展開していた。国民は民意が反映されない政治に不信感を募らせ、国中には不穏な空気が漂っていた。

日本という国が大きく揺れていた明治時代半ばに、紀州の大自然に囲まれ健やかに逞しく育った光太郎は、1918（大正７）年８月、26歳で現在の大阪市北区太融寺町に三好鉄工所を創業した。長屋の床を落として旋盤を据えただけの小さな町工場だったが、工作機械に対する光太郎の熱い思いが詰まっていた。

当時、旋盤やフライス盤、ボール盤などの工作機械のほとんどは、産業が発達していたドイツから輸入されており、光太郎はそれら工作機械の輸入元である機械工具商社と取引関係にあった。

その頃の工作機械類、たとえばベルト掛け式段車旋盤は、電動機から工作機械に動力を伝達するため、動力伝達主軸だけでなく中間軸にもベルト掛けがされ、ジョイントに相当する動力経路は複雑だった。軸の材質も、当時はまだ鋼が一般的ではなく、通常の鉄でつくられていたため、すぐに傷んで摩耗し使えなくなっていた。替わりの部品をドイツのメーカーに注文しても、輸送技術の発達していない当時は船便で光太郎の手元に届くまで３〜４か月の期間を要した。

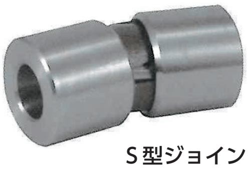
それでは仕事にならないと、もともと手づくりで何でもつくってしまう職人気質であった光太郎は一念発起し、ベルト掛け式旋盤の構造を研究、自らジョイントの開発に乗り出した。

史上初の国産 ユニバーサルジョイントの開発に成功

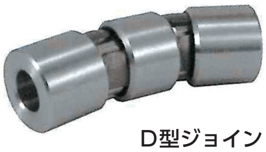
光太郎がつくろうとしていたのは、ユニバーサルジョイントという部品で自在継手ともいわれ、継手の中でも特に２つの材の接合する角度が自由に変化する継手のことを指す。最も一般的な十字形軸継手として広く利用されている構造のものは、1676（延宝４）年にイギリスのロバート・フックにより発表されたといわれており、その基本的な構造はおよそ350年が経った今でも変わっていない。その機能上の特徴は、軸心の異なる二軸、あるいは交差する二軸を連結して、回転運動を伝えるのに使用されている。

国産ジョイントの開発は失敗の連続だった。試作が失敗に終わる度に幾度も挫折したが、技術者としてのあくなき向上心が光太郎を奮い立たせた。

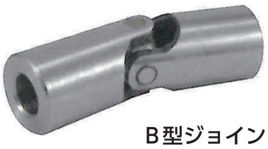
試行錯誤を繰り返し、1930（昭和５）年、光太郎はついに史上初の国産ユニバーサルジョイントの開発に成功した。はじめは先の見えない挑戦ではあったが、研究を始めた頃は知識になかった精密小型部品加工の技術やそのノウハウを得ることができ、経営者として、また技術者として、光太郎は大きな一歩を踏み出した。



S型ジョイント



D型ジョイント



B型ジョイント

空襲を逃れて…

ユニバーサルジョイントの国産化を果たした光太郎は、1933（昭和８）年４月、工場を大阪市北区太融寺町から、大淀区大仁本町（現・北区大淀町）へと移し、ジョイント製造工場を開設した。その４年後には本社・工場を拡充するために大阪市東淀川区西中島に移転した。この頃は主に計算機の軸受やブラケット等の精密部品加工を下請けしており、その関係から取引先メーカーのある西中島に移転したもので、当時ジョイントはメインの事業ではなかった。

光太郎が工場を移転したのと時を同じくして、盧溝橋事件に端を発する日中戦争が始まり、その２年後には第二次世界大戦が開戦、日本に暗雲が立ち込めていた。

当時、ユニバーサルジョイントは一般的にほとんど知られておらず、JIS 規格にもないほどだったが、戦争が始まると潜水艦の遠隔操作用シャフトに取り付けられるなど、わずかではあるが時代を反映するように軍需産業に用いられた。

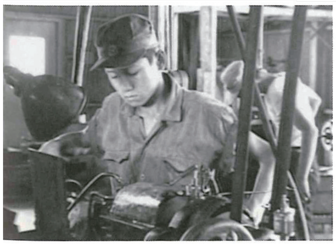
その後、第二次世界大戦の戦局が激しくなると大阪市内も空襲を受けるようになったため、光太郎は1944（昭和 19）年にやむなく鉄工所を一時閉鎖し、四国の方へ疎開した。

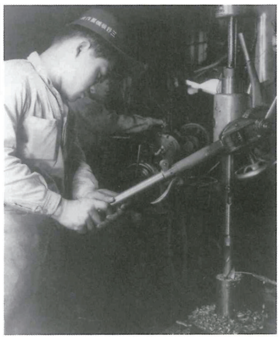
三好鉄工所の再始動

終戦後、光太郎が大阪へ戻ってこられたのは1950（昭和 25）年の終わり、世の中が朝鮮戦争の特需に沸いていた頃だった。

激しい空襲を受けて燃えてしまった建造物も多い中、光太郎の工場は奇跡的に無事だった。機械類は疎開前と変わらず据え付けられたままになっていたため、手動計算機の部品加工を下請けしてすぐに仕事を再開した。再開時の従業員はたったの４人しかいなかったが、それでも戦後復興期の日本で前を向いていかなければならないという気概があったのだろう、光太郎は新入社員や若い従業員に自ら熱心に仕事を教え込んだ。

当時の作業風景





仕事場ではみな、割り下駄に黒足袋という無防備な姿で旋盤に向かっていたため、旋盤で削った切粉で怪我をすることもあった。当時の職人は出来高制で、できあがった製品は自転車で運搬していた。

入社したその日から光太郎の家に住み込み、できあがった製品を客のもとに届ける係を任された当時の従業員は、「仕事はボール盤から始めないといけない、まっすぐに穴を開けるのがコツだ。自分の仕事が終われば先輩の横で仕事を見て技術を盗め」と光太郎からよく声を掛けられたという。仕事に関してとにかく真面目で厳しかった光太郎の、従業員を思う気持ちだった。

息子・三郎丸へ世代交代

計算機の仕事は３年ほど続いたが、それだけでは事業が成り立たないため、手動のミキサーや手動靴下編機、テープレコーダーの部品加工などを下請けするようになった。

着実な努力が功を奏したのか、その後事業は安定し、1959（昭和 34）年、三好鉄工所を法人組織に改組して株式会社三好機械製作所と社名変更した。

そしてこの改組を機に、光太郎は取締役会長に、二代目社長に息子の三好三郎丸（さぶろうまる）が就任した。三郎丸は父の光太郎と同じくものづくりが得意で、旋盤に必要な工具類を手づくりすることもしばしばだった。一方で、技術肌の光太郎に対して三郎丸は経営に明るく、近代的な経営体制確立を目指し、意欲的に作業環境改善、快適な職場環境づくりをはじめ、福利厚生の充実にも目を向け、さらなる社内改革に取り組んでいった。

社是には「つながりをより大切にします」、信条には「誠意と熱意　責任の自覚　計画的行動　創意工夫　向上への努力　協調・融和」という言葉が制定された。

こうして、株式会社三好機械製作所は 45 名にも増えた社員とともに新体制でスタートを切った。

三好三郎丸氏

大阪国際見本市に出展

さらなるユニバーサルジョイントの認知度向上を目指し、1960（昭和35）年に開催された大阪国際見本市に製品を出展することにした。

展示したユニバーサルジョイントは、ものめずらしさも手伝って予想以上に好評を博し、見本市終了後には機械工具メーカー３社と契約を結ぶまでだった。それまで月産1,000個ほどだったジョイントの製造に対し、いきなり１万個の注文が舞い込んだのだが、懸念となったのは製造能力だった。いきなりの大量注文に嬉しい悲鳴を上げながら、急遽下請け業者を増やして部品加工を調達し、組立は自社で行ってなんとか注文に応えることができた。

これを機に、ユニバーサルジョイントの本格的な製造に乗り出し、量産を開始した。この頃、三好機械製作所の国内シェアは約40%であったが、さらなるシェア拡大を目指し、生産体制の充実、製造能力の増強、技術的なノウハウの蓄積に力を注いだ。

工場の移転、設備の拡充

東京オリンピックの開催が1964（昭和39）年に決まると、国鉄新大阪駅（現・JR新大阪駅）の建設計画が持ち上がり、それに接続して大阪地下鉄（現・大阪メトロ）御堂筋線が延伸されることが決定された。西中島の工場がその計画路線上にあったことから、併せて本社・工場の移転計画が急浮上した。ユニバーサルジョイントの製造が順調に増加していく中、従業員も設備機械も増えた西中島の工場はすでに手狭になっており、工場に隣接する三郎丸の自宅に急ごしらえの倉庫をつくって、そこでジョイントの組立をしていたほどだった。

こうして1962（昭和37）年に本社・工場を兵庫県川西市東多田に新設、移転した。

大阪国際見本市に出展
機械をイメージした歯車の中に三好の「M」がデザインされた社章と、その前にはユニバーサルジョイントが展示されている。

次世代につながれていく思い

本社・工場移転に伴う設備投資等で経営状況は必ずしも楽ではなかったが、事業そのものは好調で移転の翌年から経営健全化と事業拡大を目指してアメリカに進出し、海外輸出を開始した。

海外進出を果たした同年、創業者である三好光太郎が73歳でこの世を去った。創業50周年を迎えた1968（昭和43）には、その偉業を称えて川西工場敷地内に光太郎の銅像が建てられた。

創業当時より大切にしてきた人とのつながりを支柱として、人材育成にさらに力を入れて取り組み、1971（昭和46）年には兵庫県認可による三好機械高等職業訓練校を開設した。働きながら技術を学びたいという向学心に燃える従業員を対象に、勉学への積極的な支援を行った。現在は企業内の職業訓練校という形態で独自運営しており、新入社員及び中途採用者の教育の場として引き継がれている。

1990（平成２）年には社名を現在の三好キカイに改め、同時にロゴマークも制定した。その翌年には、ジョイント総合メーカーとしての高度な技術とノウハウを集結させてパイプジョイントシステム「パイジョン」を開発した。

その後も同社は、時代の荒波を乗り越え、幾多の困難を切り抜けながら今年で創業100周年を迎えた。

2018年現在、各種の産業機械・精密機器に利用されるユニバーサルジョイント及び関連商品は130品種1,000アイテム、また、組立フレーム部材パイジョンは250品種2,500アイテムを数え、同社の技術力は多様なニーズに応えて各分野で高い評価と信頼を得ている。ユニバーサルジョイントのリーディングカンパニーとして、豊富な経験に基づいて積み上げられた確かな技術は、次なる100年へと確実につながれていく。

ユニバーサルジョイント

パイジョン